

研究雑話 (64)  
 人間発達の物質的基礎 (二八) … リズムと同期 (六)、「手で聞き、足で歌う」ということ。

藤井 力夫

今回は、手の交互開閉動作のスムーズな交替が屈曲時からの伸筋(総指伸筋)の準備放電によりなされていることをお話ししました。「握り加減(屈筋)」よりも「放し加減(伸筋)」、これが大事ということでした。書字動作(雑話58)で述べた「機能肢位」は、手首・半回内位により伸筋の「放し加減」が最適化されるということでしょう。伸展の反射生理や姿勢・筋トーンの神経機序について述べる必要がありますが、これらは「動作学誌上実習」として後ほどお話しする予定です。今回は、比較音楽学で言われる「手で聞き、足で歌う」(C. ザックス、一九五九)ということ

左足踵接床開始時に縦線を引くよう工夫しました。見事に小節線の役割を果たしています。以前お話しした拍節リズムで言えば、左足接床が「前拍」、右足接床が「後拍」に相当。八足拍四小節一つの旋律を形成。足拍に合わせて、七つの呼吸連続と一つの吸気。これにより旋律生成。即ち、吸気は一回しかできませんが、呼吸は何回かに分けることができます。抗重力の足拍着床に呼吸リズムを合わせるにより拍節リズムが生成されています。足拍は音価をも基底しているのです。

小節)として、心拍動と歌唱音節をパターンごとに重ね合わせてみました。心拍動、呼吸、歩行、これらが織りなす呼吸調節のリズムと言えらるでしょう。／ひ・ー／らい・た／(前動機)／ひ・らい／た・〇／(後動機) … 前動機、／ひ・ー／(タイプ1・A)。二足拍分の持続。この音価をある音高で持続できるか否か。これがポイントです。／らい・た／(タイプ3・B)の「らい」。音高は同じだが周波数密度で／ら／から／い／へと弱くしています。後動機、／ひ・らい／(タイプ3・A)の「らい」。／ら／から／い／へ音高差を作り、終止感へと強める。／た・〇／(タイプ1・B)。「足拍」による内的尺度の安定が、「音価」を自由にし、拍節リズムを形成していると言えるでしょう。(北海道教育大学教授)

めぐってお話したい。民族音楽からの提起です。この間、強調してきた「予期的準備」の機構は、余分な力が抜けるとともに、リズム同期の内的な尺度の形成を意味します。人類における直立二足歩行の安定がこの形成を可能にさせたと考えられます。三歳後半から四歳にかけての手指のレベルでの交互開閉動作と、足のレベルでの走からスキップへの変換。これは、歩くリズムの足拍音価II四分音符の安定があつてのことです。

リズム同期の内的尺度、「足拍位相」の存在と利用

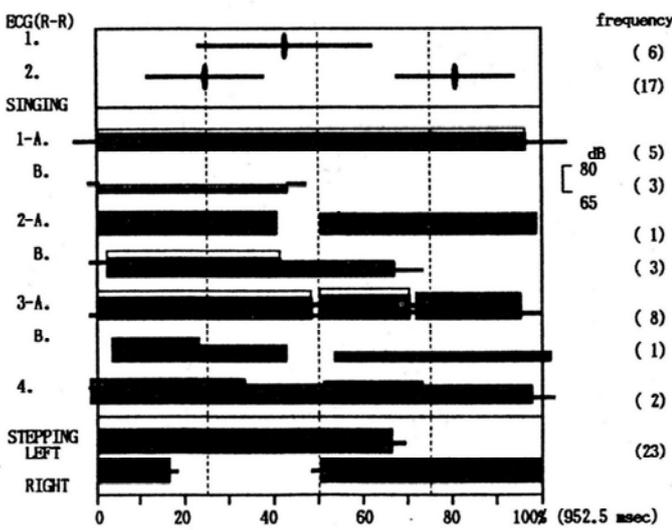
(例・「ひらいたひらい」歌唱、T.K. 男、13 yrs old)

A. 8足拍4小節のリズム：休符時吸気と呼気持続の調節



(注：採譜、スペクトル、心電R波、呼気流量、音声、足拍)

B. 足拍サイクル内での歌唱パターンの生成と同期



(注：「ひらいたひらい」歌唱時の各位相の重ね合わせ、平均と分散。上から、心電R波拍動(回数ごと)、歌唱パターンごとの音価とパワー(dB、分散は白抜き)、左右の足拍)